

## ヴェーユと実存主義者たち④

村 上 吉 男

それでも〈即自〉に〈わたし〉を割り当てるようにみられることには、筆者をはじめ、誰もが釈然としなはずである。なぜならサルトルが〈意識〉を中核とし、その〈対自〉と〈即自〉にかかわる哲学をめざしていたためか、〈わたし〉が〈意識〉であることは不可能になり、だから〈わたし〉は〈対自〉や〈即自〉そのものと認められなくなるとはいえ、〈わたし〉〈自己〉や〈自ら〉と訳される語が散見しているかぎり、〈わたし〉〈自己〉や〈自ら〉のいわば所在を確かめるにあって、筆者は〈自己〉や〈自ら〉をさす〈わたし〉を〈即自〉に「付け足し」て捉えるほかなかったと、またあの外的〈世界〉が〈意識（対自）〉に与しないのは理解できるにしても、即〈即自（存在）〉に見立てられたはこれいかにといわなければならぬからである。

しかし〈わたし〉や外的〈世界〉のことが前段で述べたごとくに受け取られることを、サルトルの語った〈人間と世界は相対的な存在である〉に当てはめるならば、この既出引用文中の〈人間と世界〉はいかなる共通点を有して〈相対的な（相互に関係のある）存在〉になり得ようかを知る必要がある。それには、ここに記される〈人間〉は〈存在である〉からして、〈人間存在〉といい直せることが、かつ〈人間存在〉は〈意識存在〉（あるいは〈意識〉）としていう〈対自存在〉と〈即自存在〉と〈わたしの存在〉で〈構成される〉といわれたことが想起されねばならない。そのうえで上記既出引用文を読むならば、〈人間存在〉で〈構成される〉一方は考慮の外にあるかということが出来る。つまり〈人間存在〉から除外されるは〈意識存在〉の方である。それは〈意識（存在）〉としての〈対自（存在）〉と即自（存在）との関係〉が質されるならまだしも、〈人間（意識）存在〉が既出引用文に窺える、〈意識〉であり得ない外的〈世界〉を対象にさせることは、要は外的〈世界〉を〈相対的な存在〉に位

置づけさすことは不可能だといわねばならぬからである。それゆえ〈即自存在〉とみなされていた外的〈世界〉に〈相対的な存在〉たるは、〈意識〉でいう〈即自〉に「付け足しにされた」〈人間（わたしの）存在〉でなければならなくなる。〈即自〉にかかわる共通点こそ〈人間（わたし）と（外的）世界〉を〈相対的な存在〉として捉える証しにさせ得る。しかしながら、彼が既出引用文中の〈人間〉をかゝの指摘と同様に明確に語らないために、筆者がこのような解釈しかできなかったというにせよ、そう解釈した証拠がまったくないわけではない。筆者はこの同じ既出引用文の後半に〈わたし〉と明記された語によって、〈人間（存在）〉を〈わたし（の存在）〉と断じさせ得たのだから。

さらに、〈わたし〉と外的〈世界〉にあつて、筆者がこれらをして「外的〈世界〉を〈わたし（の世界）〉と〈関係〉あるごとくに装わせていた」と書き添えていたことは、サルトルが〈わたし〉を語るときに、外的〈世界〉を、あるいは外的〈世界〉を語るときに、〈わたし〉を持ち出す関係にあることを示唆させると、要は〈わたし〉と外的〈世界〉は同時的に取り上げられ、言及される感がするということである。このことは筆者に、たとえば疾うに触れた、〈この対自とこの世界〉という表記において、〈この世界〉の方を〈わたし〉や外的〈世界〉との「複数」の意味把握を可能にさせては、いずれになるかが分からずに受け取らせることによって、〈わたし〉や外的〈世界〉のことをして、彼が〈意識〉にいう〈対自〉をたえず優先させていた、その〈意識（対自）〉に対する見方に比べると、「第二義的」で、しかもどうでもよいと、つまり〈何ものか（quelque chose）〉と彼にいわせるだけで、〈何ものか〉を突き止めんと〈思惟〉させる気配さえないように思われてならないのだ。しかり、彼は一度でも、〈わたし〉が何より先きに〈即自〉に「付け足しにされ」て語られると筆者にみえた以外に、〈わたし〉の正体が何だと、外的〈世界〉が〈意識でない存在〉と、要は〈即自存在〉と断じた以外に、外的〈世界〉が何だと言及したか。彼にその言及がみられるとすれば、それはせいぜい〈他者とは、事実、他人である、すなわちわたしではないわたしである〉<sup>(1)</sup>といわせるぐらいでしかないであろう。〈わたし〉に代表させてあらわされる、この引用文に、筆者は同時に、外的〈世界〉のことさえ適当させてかまわぬと読むことができる。なぜなら外的〈世

界〉は既出引用文にいう〈事物〉や〈他者〉であると、しかも〈わたし〉と外的〈世界〉が「同時」的に問えるは、たとえば他の既出引用文に、〈無（néant）（なるもの）は無（néant）が世界の無（néant du monde）として明白に自己（わたし）を無化するときには無（néant）であることができない〉関係にあると記されていたからである。したがってこの段落で最初に掲げた引用文に語られる〈わたし〉と、筆者がそこに「適当」させるとした外的〈世界〉とは、〈わたし〉を〈事物〉にみるかを別にして、〈他者〉を「共通点」にし得るといわせることが可能になる。そしてここではひとまず、この〈他者〉は〈意識（対自）でない存在〉に、要は〈即自存在〉に関係させられそうであるということにとどめおく。

だが前段で触れたように、サルトルは外的〈世界〉に関し、これを〈事物〉や〈他者〉と表現するだけであり、その〈事物〉や〈他者〉の正体が何か（彼の主張では何かは一度は記し、次回に譲る〈偶然性〉になろうか）を、たとえば各現象が〈嘔吐〉となって生じくと語らせるにせよ、何ゆえ〈嘔吐〉でなければならぬかを明かしはしなかった。要は筆者に外的「〈世界〉が即〈即自存在〉に見立てられるはこれいかに」と問わせるにあって、彼が外的〈世界〉をこの〈即自存在〉とみるばかりか、〈意識（対自）でない存在〉と述べて済ませることは、それら以外の答えが見当たらない例にさせるにほかならない。だからその外的〈世界〉のことですら、これが〈意識（対自）でない存在〉とみられてはそもそも〈意識〉で語られる対象になじまないといえるにもかかわらず、彼が外的〈世界〉を「即〈即自存在〉」と表記したのは「これいかに」と筆者にいわせるしかなかったのだ。このことはしかし、彼が〈意識〉を哲学の中核に据えて論じていたという証左にもなろうし、〈意識〉を強調すればなおさら、筆者は〈事物〉はさておき、〈他者〉と理解される外的〈世界〉を「即〈即自存在〉と見立て」る即断をしてはならないと、換言すると外的〈世界〉は〈意識〉で質される〈即自存在〉自体ではなく、〈わたし〉に関係する（それゆえ〈わたし〉は〈意識〉自体でなくなる）。しかしてそうみられた〈即自（存在）〉は〈わたし〉に「付け足しにされ」て関係するといわなければならなくなる。これはまた、筆者が〈意識〉として語られよう〈対自と即自との関係〉を「相即不

離」の関係にあると指摘していたことに倣って、〈わたし〉と外的〈世界〉の関係も「相即不離」でしかないといえるならば、外的〈世界〉の立場に立っては、外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされ」ているとも表現できるであろうことを示唆させる。とまれ筆者にすると、外的〈世界〉なる〈他者〉は〈即自（存在）〉をさすのでなくなるのだから、〈即自（存在）〉という表記は誤解を招きかねないか、間違いかとみなされることになる。

一方〈わたし〉と〈他者〉に関してはどうか。〈他者とは、…わたしではないわたしである〉と記されたからして、筆者はこの文章を「〈わたし〉は〈わたし〉である〈他者〉だ」といい換え得る。したがって〈他者〉は〈わたし〉であるが、〈即自〉ではなくなる。つまり〈わたし〉が〈他者〉であるがゆえに、〈わたし（他者）〉は〈意識〉の範疇で語られよう〈対自〉にはむろんのこと、〈即自〉自体にも等しくみられることがない、要は〈意識〉やその〈対自〉と〈即自〉として捉えられることがない（このことは後述で証明する）。だから〈わたし〉がそれと訳されるほどに何回か散見されるにあって、筆者はこの〈わたし〉をば〈対自〉に、とりわけ〈即自〉に「付け足し」おくほかない立場を明確にさせたわけである。またこれ以外に、すなわち〈わたし〉が〈意識〉であり、その〈対自〉や〈即自〉であるとみることは、〈わたし〉が〈他者〉であるとしたことに矛盾を生じさせかねなくなる。なぜなら、〈他者とは〉〈他人であ〉り、〈わたしではないわたしである〉と表記された、先きの引用文を例にしては、〈わたし〉は〈わたし〉以外を対象にする〈他者〉要は〈他人（や事物）〉をでなしに、ここにいう〈他者とは〉こうした〈他人〉を除いた〈わたし〉をさす、すなわち〈わたしではない〉〈わたし〉をさす〈他者〉でしかないことが証されるばかりか、この〈わたし（他者）〉は一見していたように、〈意識（対自）でない存在〉であるほか、〈即自存在〉でもなくなるために、〈意識〉やその〈対自〉と〈即自〉に適当させられないと、しかるに〈わたし（他者）〉の語が明記された以上は、〈意識〉にあっていわせる〈対自〉と〈即自〉に〈他者〉の様相で、要は〈他者〉なる〈わたし〉として「付け足しにされ」ていなければならなかったといえるからである。それゆえ筆者は、彼にとって、〈意識〉である〈存在〉が〈対自存在〉や〈即自存在〉なのであり、その〈意識〉で行使

し得る能力が〈理性（思惟）〉以外にないとみるに対し、〈わたし〉の方はかかる〈理性（思惟）〉すら持ち合わせてはいないと再度いわずにおれなくなる。

そこで筆者はサルトルに語られる〈わたし〉がなかでも〈即自〉に「付け足しにされた」からして、〈理性（思惟）〉の働きを失わしめると、いやかかる能力さえ当初より有しはしないからして、〈即自〉に「付け足しにされた」と、はたまた他の理由（論理）からと、そうでなければ、いったい何がゆえに用いられたとみるのかを見極めねばなるまい。そのために、筆者は何を措いても、〈わたし〉なる語があるか否かを確かめたり、前記していた通り、〈わたし〉が〈無（néant や rien）〉にかかわって、〈わたし〉の〈無（néant）〉や〈わたし〉の〈無（rien）〉を現出せしめる、当の〈他者〉になり得るかを明らかにしたりする必要に迫られる。筆者はだから、これまで取り上げてきた諸引用文を参照しつつ、まずは〈わたし〉に関し書かれた文章（訳文）を拾い出すことにする（各訳文は段落ごとに表記するが、掲載引用文の順序とは異なるかと断っておく）。

〈わたしが存在することは完全に偶然的なのである。なぜならわたしはわたしの存在の根拠ではない（からである）。〉

〈存在することは、対自にとって、対自が ... 即自を無化することである。〉

〈自らを無化し得るのは存在だけである。... 自らを無化するためには、存在するのでなければならぬ ... 〉

〈対自とは自己を意識として正当化するために、即自としての自己を失なう即自である。〉

上記訳文の最初に〈わたし（je）〉（の語）が記されるからして、〈わたし〉が明示されるだけでなく、問われていることについては、誰も異を唱えることができなくなる。そのうえで筆者は上記三番目と最後の各訳文中の〈自らを無化し得る（する）〉や〈即自としての自己〉という〈自ら〉や〈自己〉を〈わたし〉といい換えさせてきた。この〈自ら〉や〈自己〉は代名動詞の再帰代名詞（se）で表記される（〈se〉ゆえに、訳語は〈自ら〉すなわち〈自己〉である）。たとえば〈se néantiser（自ら（自己）を無化する）〉、〈se fonder（自己（自ら）

を正当化する))や〈se perdant (自己(自ら)を失なう(代名動詞の現在分詞))のごとくにある。そこで一考せずにおれぬは、〈se〉が〈わたし〉でなしに、〈comme conscience (意識として)〉の〈対自〉か〈即自〉かになることがないかである。なぜなら二番目の〈Être, pour le pour-soi, c'est néantiser l'en-soi〉の訳文では、〈即自〉が〈無化する〉の(直接)目的となっており、この〈即自〉を再帰代名詞に代えさせては〈se néantiser (自ら(自己)(ここでいう〈即自〉)を無化する)〉が成るからである。すると三番目の訳文の二箇所を占める〈se néantiser〉の〈se〉も当然〈即自〉に置換させられてかまわなくなる(ちなみにこの三番目の原文中の大文字〈l'Être (存在)〉や動詞不定形〈être〉は〈対自〉を示唆させるにちがいない)。

ところが上記最後に掲げた、〈Le pour-soi c'est l'en-soi se perdant comme en-soi pour se fonder comme conscience (対自とは自己(自ら)を意識として正当化するために、即自としての自己(自ら)を失なう即自である)〉という原文(訳文)全体で二箇所に亘って記される〈se〉は前段で見定められたと同様に、〈対自〉か〈即自〉になり得るかを質す際にあって、それでもかかる原文(訳文)全体の組み立てが筆者に〈対自とは...即自である〉と察知させては、二箇所の各〈se〉が〈対自〉や〈即自〉のいずれかに入れ換えられたり、別々に割り当てられたりされる必要があるのか、あるいはそれぞれにいい換えられたところで、〈対自〉や〈即自〉は端から〈意識として〉扱われ〈意識〉にかかわっていたのだから、おのおのをば何もあらためて〈意識として正当化する〉必要があるか疑問にさえなるのだ。そういうことであるからして、筆者は〈se〉を、要は訳語の〈自己(自ら)〉を〈対自〉や〈即自〉に宛がう必要はなく、むしろ〈わたし〉に充当させる方が妥当であるとみたわけである。サルトルが〈わたし〉を〈意識として正当化する〉と意図し語ったかは判断しにくいにして、筆者はもしや彼が〈自己(自ら)〉の〈わたし〉へのいい換えをして、〈わたし〉が〈意識〉そのものであることを〈正当化〉たらしめようとの、つまり〈わたし〉を〈意識として正当化する〉ように仕向けさせる(その際はむしろ〈自己(自ら)〉を〈対自〉とのみか、〈即自〉と理解することができなくなる)との、彼のねらいとして読み取るが、しかし〈わたし〉は〈意識〉すなわちその〈対自〉や〈即

自〉それ自体をさすのではなく、〈意識〉に、その〈対自〉に、なかでもその〈即自〉に「付け足しにされた」としかいえなかった。だから前段で〈se〉が〈即自〉に置換された例を想起せども、〈わたし〉は〈即自〉に「付け足しにされた」と捉えるがゆえに、〈即自〉そのものではないと知っておく必要があるわけである（このように、〈se（自己や自ら）〉が何をさすか明確でないのは、例の〈être（存在）〉が〈対自〉や〈即自〉になるか不明であるのと同様である）。

〈即自〉自体が〈わたし〉に換言されはしないことを明らかにしよう語句は筆者のみるところ、〈即自を無化する〉と〈自ら（自己）を無化する〉にある。〈即自〉を〈自ら（自己）〉とみなす場合にあっては、各語句は当然同意でしかなくなる。だが〈自ら（自己）〉を〈わたし〉にいい換えたうえで、〈即自〉を〈わたし〉といい直す場合には、〈わたし〉は〈即自〉に等しいと断じることができない（したがってここに立っていえば、〈自ら（自己）〉も〈即自〉ではなくなるだけでなく、〈自ら（自己）〉を〈わたし〉に換えさせないかぎり、〈わたし〉がいかなるために用いられたかという、〈わたし〉に対する目的や〈わたし〉のいわば所在が不明のままにとどまるにちがいない。また〈自ら（自己）〉の方からいえば、〈自ら（自己）〉が〈わたし〉にいい換えられずには、〈自ら（自己）〉とは何だと、いかなる役目を担うのかとなろうし、〈自ら（自己）〉が〈即自〉とみられるのでなければ、〈わたし〉が〈自ら（自己）〉の代わりに適当される以外にないであろう。そして語句の残り〈無化する〉（や名詞〈無化〉）はかぎりなく〈無〉に近くあろうが、いまだ〈無〉そのものではない表現であると付記しておく）。なぜなら〈わたし〉が〈即自〉に等しくないと言ったのは、彼にあの〈対自は無である〉という表記を、そのうえ後段にて取り上げられる〈無〉に対して、〈わたし〉の〈無〉という表記を見出せるにもかかわらず、〈即自〉のことをば〈対自〉の〈無〉に倣わせいう、たとえば「即自は無である」や〈即自〉の〈無〉とさせるごとき表現がみかけられるなどはついぞなかったことにあるからである。だから〈わたし〉の〈無〉にかかわらせるうえでも、〈無化する〉対象を〈わたし〉とみなしおかねばならぬし、すでに見したように、〈わたし〉を〈無化する〉は〈投企〉〈参加〉や〈行動〉によるのであり、実際に身体を動かす〈投企〉などを可能にさせるは〈意識（即自）〉がで

はなく、〈わたし〉が必要であったわけである。再度いうが、身体を動かす原動力は〈わたし〉であって、〈意識〉や〈意識〉にいう〈対自〉や〈即自〉ではない。〈わたし〉は〈投企〉などの主役を担うべく打ち出されてきたことを示唆させないでもない。〈即自〉が〈わたし〉と同意にならないとみたのだから、〈即自〉の代わりに〈わたし〉を入れ換えるは不可能になると同時に、〈自ら（自己）〉を〈即自〉にはむろんのこと、〈対自〉にさえ置換させることもできなくなる。要は〈自ら（自己）〉は〈わたし〉であり、〈意識〉でないと捉えられるために、〈意識〉にいう〈対自〉や〈即自〉にはなり得ない、とどのつまり筆者にとって、〈即自を無化する〉と〈自ら（自己）を無化する〉、こうした表現は〈即自〉や〈自ら（自己）〉を〈わたし〉にかかわらせてみないかぎり、矛盾でしかないということだ。

さらに〈即自〉（あるいは〈対自〉）が〈わたし〉とならないことを明かす語句は、〈l'en-soi se perdant comme en-soi（即自としての自己（自ら）を失なう即自）〉と〈sans se perdre comme pour-soi（対自としての自ら（自己）を失なうことなしに）〉とされるなかでの、各再帰代名詞〈se〉と各〈comme〉に従う語との訳語〈即自としての自己（自ら）〉と〈対自としての自ら（自己）〉にある。〈comme〉を〈としての〉と訳したはその一用法「資格」によるといえたならば、「資格（としての）」とは〈comme〉に続く訳語〈即自〉や〈対自〉のそれぞれに、〈se〉すなわち〈自己（自ら）〉が「付け足しにされた」ごとき「かかわる」役目を担わせられるにちがいない、少なからず〈自己（自ら）〉が〈即自〉や〈対自〉に等しい表現を意味させるのではないし、前段で述べたことによって、その〈自己（自ら）〉は〈わたし〉と受け取ることが可能になろう。だから〈自己（自ら）〉すなわち〈わたし〉は〈意識〉、その〈即自〉や〈対自〉自体をさすのではないうえに、〈自己（自ら）〉のほか、これに宛がわれる〈わたし〉の語がサルトルに用いられては、〈即自としての自己〉や〈対自としての自ら〉の〈自己〉と〈自ら〉は〈即自〉や〈対自〉のいずれかにも置換させられないことが、かつ〈自己〉と〈自ら〉は〈わたし〉でなければならぬことが、それでいて筆者は〈自己（自らやわたし）〉がその〈即自〉や〈対自〉に「かかわる」と指摘したのだから、「かかわり」方はそれぞれに「付け足しにされ」るしかないこと

が証明されたことになる。そう捉えないでは、繰返すが、彼が〈わたし（自己や自ら）〉を語り記すはいかなる意図でか分からぬままになろうほか、〈わたし（自己や自ら）〉が〈対自〉なかでも〈即自〉に適當するとみるならば、代名動詞の用法に従う以外にいう〈わたし〉がさらに持ち出されたは何のためか、〈わたし〉はどこに使われる語になるのかであろうし、少なくとも不明にあっては、〈わたし〉は宙に浮く語でしかなくなろう。

筆者は〈わたし〉がどこに位置させられたかを上記した通り、〈意識（対自や即自）〉に「付け足しにされた」と断じたが、それでもそう結語するは、サルトルが〈対自は無である〉と主張したと同時に、〈わたし〉にも〈無〉がみられると語った、その〈わたし〉の〈無〉に触れ確認してからでも遅くはないし、何より「付け足しにされた」と筆者にいわせるかぎり、彼にいう〈意識〉にとって、この〈他者〉なる〈わたし〉が何を意味させるかを探るうえで、こうした作業は不可欠になるのだから。そこで筆者はまた、〈わたし〉に関し書かれた文章を先きに拾い出したと同様に、ここでも〈無〉に関する文章を取り上げておかざるを得なくなる。

〈無（néant）（なるもの）は無（néant）が世界の無（néant du monde）として明白に自己（わたし）を無化するときにしか無（néant）であることができない。〉

〈世界が無（néant）の即自的な相関者であるかぎりは、世界は、もともと、わたしの世界である。〉

〈世界がわたしに指し示す、この第一義の関係はわたしの存在であり、かかる関係によって、わたしのために、世界があらわれるようになる。〉

〈わたしたちは対自をひとつの無（un rien）と名付けることができた。〉

〈対自は即自に対する、無化や徹底的否定であった。〉

〈現前はわたしが何ものかでない（もの）への現前として、ひとつの徹底的否定を含む。〉

〈人間存在は、純粹否定性が世界のなかにあらわれる存在であるだけでなく、自己（わたし）に対して否定的様子を取り得る存在でもある。〉

上記はすべて筆者が持ち出した既出引用文である。これらについては、またその一部の語句についてはすでに筆者なりの説明を加えてあるが、ここに再度取り上げたはたんに羅列させた感が否めないとはいえ、それでもあるねらいのもとに関連させ得る文章をまとめおいたことにある。「あるねらい」とは上記既出引用文によって、前段で述べた〈わたし〉の〈無〉を証すことだけではなく、これまで筆者が提示に終始した見方のいくつかを証明させんとすることをさす。個々の文章に対する説明を繰返さずに、しかしかかる説明を踏まえながら、引用文全体（以下で記される序数詞は引用文掲載の順を示す）を通して読むと、何より一に、確かなことは〈対自〉にばかりか、〈わたし〉にも〈無〉がみられることである。しかも〈わたし〉の〈無〉にさえ、一番目の文章にいう〈無 (néant)〉とともに、〈無 (rien)〉があるとされていた。〈わたし〉に〈rien〉があると語られたは、六番目と七番目の文章に述べられる語句〈ひとつの徹底的否定〉や〈純粹否定性〉と〈自己 (わたし) に対して否定的様子を取り得る〉が〈rien〉であることを明かすからであった。だがたとえば〈ひとつの徹底的否定 (une négation radicale)〉が〈無 (rien)〉と明記されていないにもかかわらず、何ゆえに〈rien〉とみなし得たのか。それはこの語句の冠詞が〈ひとつの (une)〉であったからである。そこで「もう」〈ひとつの〉〈徹底的否定〉が想定された。これこそ四番目の、〈対自をひとつの無 (un rien) と名付けることができた〉という文章での〈un rien〉であり、五番目の、〈対自は即自に対する、無化や徹底的否定であった〉という文章である。〈無 (rien)〉の語を明示しない五番目は別にして（〈徹底的否定〉の語句は無冠詞で用いられる）、〈対自〉における〈無 (rien)〉を〈ひとつの (un)〉と表記した以上、ここにも「もう」〈ひとつの〉〈無 (rien)〉がなくてはならなくなる。この「もう」〈ひとつの〉〈無 (rien)〉にいわば割り当てられたのが〈わたし〉の〈無 (rien)〉すなわち〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉でなければならなかったといわせ得るわけである（一方〈対自は … 徹底的否定であった〉とされる〈徹底的否定〉は〈ひとつの〉〈徹底的否定〉に充当し、この〈徹底的否定〉はだから、〈ひとつの (un)〉の方の〈無 (rien)〉にしかならないとい得るのだ）。

しかし〈無 (rien)〉がなぜ〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉に受け取られた

かである。すぐに気づかせるは〈rien〉が〈néant〉とは何かしら違う〈無〉にみられるであろうし、〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉にもいい換えられたりされねば、およそ当の〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉の語句はいかなる役割を担い、何に用いられたのか定かにならないと同時に、〈無〉が〈néant〉の語だけにとどまっていたは、その〈néant〉と〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉に判断されよう〈rien〉とがどう関連するか、かかわらないかさえ分からないことを、〈rien〉の語をはじめとした各語を浮き上がらせることを露呈させてしまうにちがいない。そうではない。サルトルにとって、〈rien〉すなわち〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉は、〈néant〉をして〈何ものかでない〉ことを〈徹底〉せしめては〈純粹〉にされた〈無〉である関係を描かせることにあったのだ。〈対自〉とされた場合に例を取ると、かの〈対自は無（néant）である〉という〈néant〉にはじまって、その〈対自（意識）〉の〈néant〉から、前記四番目や五番目の各文章中の〈無（rien）〉や〈徹底的否定〉へと深まる（展開される）ように繋がるのであった（また七番目の文章（訳文）中の〈純粹否定性〉については、この語句に続く〈世界〉の語が後段で問う外的〈世界〉以外に、〈意識（対自）〉をさすと捉え得るならば、〈意識（対自）〉に関した〈純粹否定性〉すなわち〈無（rien）〉になるであろう）。このことは〈わたし〉の場合にあっても同様である。すでに触れた通り、一番目の文章中の〈自己（わたし）を無化する〉に生じる〈無（néant）〉にはじまって、その〈わたし〉の〈néant〉から、これも前記六番目の文章中の〈わたしが何ものかでない（もの）への現前として〉あろう「もう」〈（ひとつの）徹底的否定〉へや、七番目の文章中の〈純粹否定性〉が〈自己（わたし）に対して否定的（négation（否定）の形容詞 négatif）様子をとり得る〉〈無（rien）〉へと深まる（展開される）ように繋がる（関連させられる）ということであった。

しからば以上のことをもって、サルトルは何ゆえ人間をば〈意識（対自）〉と〈わたし〉を区別させたり、〈意識（対自）〉と〈わたし〉の各〈無（néantやrien）〉を打ち出したりせずにおれなかったのかである。そのようにいえる因は、彼が前記七番目の文章に記した〈人間存在（l'être human）〉にあって、何よりこの〈人間存在〉を〈意識（対自）存在〉と〈わたしの存在〉で〈構成される〉とみ

たところにある（〈この対自とこの世界（ce pour-soi-ci et ... ce monde-ci）〉という語句表記もこれに相当する）。したがって〈意識（対自）〉に〈無（néantやrien）〉が見出される以上、〈人間存在〉の一〈構成〉なる〈わたし〉に対してさえ、〈わたし〉の〈無（néantやrien）〉がなければならぬことになる。彼に語らせる〈人間存在〉を〈意識〉とだけ、あるいは〈わたし〉とだけ、あるいは〈意識〉すなわち〈わたし〉とは捉えずに、いわば二本立てにみたことが〈人間（存在）〉を煩雑に仕立て上げざるを得なくなったは確かであろう。だが実際二様に分けられたとなると、あのデカルトが《真理の探求》や「日常的用法」で各用いた〈l'esprit（精神）〉や〈l'âme（魂）〉とヴェーユが使用した〈l'âme（魂）〉をさすにちがいない、サルトルにいう〈la conscience（意識）〉は、〈わたし〉が〈意識〉そのものではないと断じられるのだから、〈わたし〉を〈意識〉ではない、どこかのところに成り立たせるか（〈わたし〉が〈意識〉をという、上記の主語と目的を逆にする、ここでの見方は後記もする「〈意識〉を中核にする哲学」とみる理由がために成立しない）、それとも〈意識〉のなかのどこかにあるごとくに見立てられるのかのいずれかになるであろう（筆者はこれについては〈他者〉を語るときに触れることにし、ここは後者のことが適当するというだけにとどめおく）。

そこで〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉〈人間（存在）〉はサルトルにあって、そのそれぞれの〈無（néantやrien）〉しか問題にならなかったにせよ、当の〈無（néantやrien）〉によって、どのように関連させられていたといえるかを再度確かめおかねばなるまい。〈意識〉の〈無〉において、前記五番目の文章中の〈対自は即自に対する、無化...であった〉とは〈対自〉が〈即自〉の〈無化（néantisation）〉の語意をして、〈対自は無である〉、その〈無（néant）〉を予想させ得るし、〈対自〉の〈無（néant）〉が〈無（rien）〉に深まることも、同文章中の〈徹底的否定〉で、さらに四番目に述べられる〈（ひとつの）無（un rien）〉で知り得たことである。そして〈わたし〉において、七番目の文章中の〈純粹否定性（négativité）〉の一が〈néant〉でなく、〈rien〉を示唆させては、〈自己（わたし）〉に対して否定的様子を取り得る〉ことが〈わたし〉を〈rien〉にするが、この〈わたし〉の〈rien〉は一番目の文章に窺える〈わたし〉の〈néant〉

を前提していなければならなかった。しかも以上のことから、今問う〈わたし〉は〈対自〉や〈即自〉なる〈意識〉と無関係ではないことが導き出されたことにあった。〈わたし〉がかかる〈意識〉に関連（関係）するとみえたは、なかでも〈わたし〉が〈即自〉に「付け足しにされた」関係での〈わたし〉にほかならなかったからである。それゆえ〈わたし〉の例の〈無（néant）〉が〈無（rien）〉に展開されるとはいえ、〈わたし〉の〈無（néant）〉は〈意識（対自や即自）〉を中核にする哲学にあって、〈対自〉の〈無（néant）〉に次いで、〈わたし〉の〈無（rien）〉もまた、〈対自〉の〈無（rien）〉に次いであらわれくるしかなかったのだ。

また一に、前記した、一番目から七番目までの引用文には〈意識（対自や即自）〉と〈わたし〉のことのほかに、〈世界〉要は筆者にいう外的〈世界〉のことが語られていたし、外的〈世界〉がいったい〈意識（対自や即自）〉に、それとも〈わたし〉にかかわるとみるべきかを探っておかねばならない。〈世界〉のことが記されるは一、二、三番目の各文章である。とりわけ一、二番目の各文章にあっては、〈世界〉が〈無（néant）〉であると書かれくる。筆者がこの〈世界の無〉を明らかにできるは当然、〈世界〉が〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉〈人間存在〉のそのいずれに関係すると見て取れるかを述べてからになろう。そこでまずは〈世界〉が関係するは〈人間存在〉たる〈意識〉か〈わたし〉かを確かめることである。すでに見した通り、サルトル自身が七番目の文章中での語〈世界〉でもって〈意識（対自）〉に読み取らせんとさせたところからは、〈対自〉や〈即自〉として問われた〈意識〉の方が〈わたし〉に比べ優位に立っていたと推察され得る。しかり、以下に掲げる既出引用文こそ、〈意識（対自や即自）〉が〈わたし〉よりか優位となる関係を明かすからである。

〈対自は、本来、自らの即自－存在と一致できない存在である。〉

〈対自は、対自が自己自身と一致しないかぎりにおいて実存（存在）するごとく、自己自身を規定する（意識）存在である。〉

しかし上記二文章をよく読むと、一つ目の文章中の〈自らの即自－存在（son

être-en-soi)と、二つ目の文章中の〈自己自身 (lui (un soi) -même)〉の各語句は〈一致しない (できない) (ne pas (pouvoir) coïncider)〉で共通していても、整合しないことに、あえていえば矛盾することに気づかされる。〈自らの即自-存在〉と訳したうち、〈自らの〉は所有形容詞ゆえに、筆者が度々用いた〈わたし (の)〉ではなく、〈対自の〉をさす語になるし、〈自己自身〉の方は〈自らの〉とした場合とは逆に、〈対自〉ではなく、〈わたし〉として受け取らざるを得なくなる。〈自己自身〉を〈対自〉といい換え、〈対自が自己自身 (対自)と一致しない〉とみるは、この文章ならびに文章全体の文意を通らなくさせる。とまれ、一つ目は〈自らの〉という〈対自〉が〈即自 (存在)〉のままでは〈対自 (存在)〉になれない、〈即自-存在〉との関係を有すると捉えられるからして、サルトルは〈それが存在しないものであり、それが存在するものではない対自〉が〈即自-存在と一致できない存在である〉と表現したにちがいない。また一方では、二つ目の文章中の〈自己自身〉が一つ目の〈即自-存在〉と「矛盾」を避けるためには、〈自己自身〉は〈即自-存在〉にいい換えられねばならぬことが予想される。〈自己自身〉の〈即自-存在〉への換言が許されるならば、なるほど〈対自が自己自身 (即自-存在)と一致しない〉といえるのだから、〈対自〉は〈実存 (存在)する (exister)〉ことができるであろう。

だがそのようにみるだけで、果たしてよいのか。それではサルトルはなぜ一つ目と同様に、二つ目の〈自己自身〉を〈即自-存在〉と表記しなかったか。あるいは改めて、〈それが存在するものである即自 (存在)〉を、すなわち〈自己自身を規定する〉ごとき確認が彼に必要となったのか。〈se déterminer lui (un soi)-même (自己自身を規定する)〉という語句群中の、〈se〉の強勢形である〈lui〉(または「自我」と訳し得る〈un soi)〉はしかし、筆者のみるところ、〈即自-存在〉の語に置き換えてはならなかった。すると〈自己自身〉に充当するといえるは、もはや〈わたし〉しかないではないか。そうなのである。そしてこのことを証明させるのが〈意識 (対自)〉と〈わたし〉を含ませて記された、〈この対自とこの世界との統合機能によって構成される、ひとつの個別的な存在 (un être individuel constitué par la fonction synthétique de ce pour-soi-ci et de ce monde-ci)〉という表現にあったのだから。筆者にいう〈意識 (対自)〉と〈わ

たし)がもとより、この既出引用語句に窺える〈この対自とこの世界〉のそれぞれの語に相当する。要は〈この世界〉をさしていう一が〈わたし〉と受け取られることになる。加えて筆者には、〈わたし〉と〈この対自(意識)〉とが〈一致する〉必要があるとすでにいい得ていたからして、〈この対自(意識)とこの世界(わたし)との統合〉が、換言すると何度となく指摘した、〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉〈人間存在〉が成り立っていなければならなかった。にもかかわらず、彼は例の二つ目の文章で〈対自が自己自身(わたし)と一致しないかぎりにおいて〉と主張し続ける(一つ目の〈対自は、... 自らの即自-存在と一致できない〉と合わせると、二度も〈一致しない〉と書く。この〈即自-存在〉と同じ表記の〈即自存在〉についてはさらに後記する)。これらの文章はしかし、〈意識〉と〈わたし〉が〈人間存在〉としての〈統合〉を到達させようとするものと明らかに「矛盾」する。

確かに〈この対自(意識)とこの世界(わたし)との統合〉は〈ひとつの個別的な存在〉の成立に導かずにいないであろう。しかし二つ目の文章を代表させていうに、〈対自が自己自身(わたし)と一致しないかぎりにおいて〉は〈実存(存在)する〉うえで、〈対自〉が〈対自〉自身に〈わたし〉ではないことを知らしめる文面にすぎないと受け取り得るのだから、筆者が〈意識(対自)〉と〈わたし〉が〈一致〉すればこそ〈統合〉に成るとみたことと、この〈実存(存在)〉とは同時(同次的)に語れないとしかいいようがなくなるわけである。そこでは「矛盾」にもならないし、〈自己自身(わたし)〉は関係なくなる。そうであろうか。〈統合〉から〈わたし〉が欠けてしまうは、〈実存(存在)〉がゆえにせよ許されるのか。はたまた〈実存(存在)〉は〈わたし〉をいわば踏み台にせずに、かの〈投企〉〈参加〉や〈行動〉を可能にしたのか。この〈投企〉などについては再度触れることになるが、筆者には、サルトルが〈対自が自己自身(わたし)と一致しない〉と表記したことは〈わたし〉を〈統合〉に関係させるにあったのか否か明確ではなく、実に紛わしく映じており、〈わたし〉の不明確さが明確になる「矛盾」を免れなくなると指摘しておくほかない。それでも上記語句表記をはじめとして〈わたし〉と明記される以上、〈わたし〉が彼の哲学にとって〈意識(対自)〉とともになくてはならないことを証しする。し

かして〈実存（存在）する〉ときに、彼が〈対自は、…自己自身（わたし）を規定する〉と語るは、〈わたし〉を〈規定する〉ほどに〈わたし〉にかかわるとみえるがために、〈意識（対自）〉と〈わたし〉との〈統合〉を可能にする表現となる。だから〈わたし〉なしの哲学ではないと捉え得たし、〈統合〉をして、〈対自〉が〈自己自身を規定〉たらしめる、その〈自己自身〉はもはや〈わたし〉ででしかなく、〈わたし〉は〈意識（対自）〉とあわせて成る〈統合〉の一対象に位置づけられねばならなかったのである。

しからばさらに、前記二つ目とした文章中に〈対自は、…自己自身と一致しない〉と書かれたに対し、一つ目の文章中に〈対自は、…自らの即自-存在と一致できない〉と記された際の、前者にいう〈自己自身〉すなわち〈わたし〉と、後者にいう〈即自-存在〉とは同じ中身になるか否かを繰返し確認する必要がある。そのためには、前記七番目として掲げた文章中の〈世界〉を〈意識（対自や即自）〉と、また既出引用語句としてあった〈この対自とこの世界〉のうちの〈この世界〉を〈わたし〉とみなしたことが踏まえられていなければならない。しかも〈この世界〉という表記にあっての〈わたし〉は〈この世界〉の一をさすにすぎなかった。他の一と呼び得る〈この世界〉があった。それは筆者にいう外的〈世界〉であった。ようやくここに辿り着いて、筆者が語ることのできる外的〈世界〉はしかし、留意すべきこととして、筆者に〈わたし〉が即〈即自-存在〉に見立てられないと疾うに一見させていたと同じく、〈即自存在〉たり得ないといわずにおれないことにある。そのうえ留意すべきは、だから外的〈世界〉が二つ目の文章での〈自己自身〉や一つ目の文章での〈即自-存在〉への各いい換えにならぬとみるは当然のことである一方、この〈即自-存在〉はそれ自身〈意識〉の範疇で語られるがゆえに、〈意識（対自や即自）〉の〈即自〉として、外的〈世界〉をさすことにはなく、あくまで〈わたし〉に関係するとみられることにある。要するに〈対自〉が〈自己自身（わたし）〉や〈即自-存在〉と〈一致しない（できない）〉は〈意識〉の〈即自〉と〈一致しない（できない）〉のであって、〈わたし〉とではないということになるのだ。それゆえ〈わたし〉の方もまた〈即自-存在〉自体に代えられて語られはしないといわねばならぬ。なぜなら〈わたし〉は〈意識（対自や即自）〉ではないからであ

る。〈わたし〉すなわち〈意識〉であると表現されるならば、サルトルは何ゆえ既出引用語句に窺えるごとく、わざわざ〈この対自（意識）とこの世界（わたし）〉と書き込んだりしたのであろうか。かかる既出語句ならびに〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉とした〈人間存在〉の表記こそ、〈意識〉すなわち〈わたし〉と断じてはならない証左となる。彼はまさか、〈わたし〉を〈意識（対自や即自）〉に置き換えたり、重ね合わしたりするような抜け道を用意したのではあるまいに。

とまれ筆者にいう外的〈世界〉がその既出引用語句中の〈この世界〉の一であるとされては、いかなることが外的〈世界〉にいえるのかである。これについてもすでに触れ、また後述もすると、ここで確かめおくことは、筆者が〈この世界〉にいう〈わたし〉と外的〈世界〉を「相即不離」の関係にあるとみたからして、前記一、二、三番目の各文章を参照するまでもなく、〈わたし〉と外的〈世界〉はあたかも一組にして同時に語られる。要は〈わたし〉と外的〈世界〉にあっては、外的〈世界〉が〈意識（対自や即自）〉のためではなく、〈わたしのため〉にある関係を築くことにみられる。だが筆者は〈わたし〉と外的〈世界〉では、〈わたし〉の方が優位にあると指摘できる。しかも外的〈世界〉は筆者に例のようにいわせると、〈わたし〉に「付け足しにされた」関係以外ではなくなるし、外的〈世界〉が〈即自存在〉にすらなり得ないと繰返すことができる。なぜなら〈わたし〉は〈即自存在〉そのものでないと筆者に断じさせたゆえに、〈わたし〉に「付け足しにされた」外的〈世界〉が〈即自存在〉にみられようはずはないからである。だからかの〈この対自とこの世界との統合〉と記されたなかで、〈この世界（わたし）〉が「付け足しにされた」とは〈わたし〉が前記して明らかにしたような〈即自〉としての〈意識〉にばかりか、〈この対自（意識）〉にすら「付け足しにされた」ことを語ると同様に、〈わたし〉と「相即不離」の関係にあるとみた〈この世界（外的〈世界〉）〉も〈この対自（意識）〉と〈わたし〉のそれぞれに「付け足しにされた」ことを語るわけである。要するに、〈この対自とこの世界〉は〈わたし〉が〈この対自（意識）〉と対峙（対応）させられても、〈この対自（意識）〉に与しないことを示唆させる表記でありながら、しかし〈統合〉の見方からはまるで〈この対自（意識）〉に重ね合

わざす使用でもって、筆者には「付け足しにされた」としか表現できなかつたとしても、一方では、あの二つ目の文章中の〈自己自身〉を〈わたし〉といい換えた〈わたし〉は、一つ目の文章中の〈即自-存在〉そのものと捉えてはならず（したがって〈わたし〉は〈対自（存在）〉ですらないのは当然である）、とはいえその〈即自（存在）〉に、つまり〈わたし〉に外的〈世界〉は「付け足しにされた」と明示させておくほかなかつたのだし、少なからず「付け足しにされた」と述べられるは〈わたし〉が〈即自存在〉と無関係ではなくなる関係にあったということである。〈わたし〉を〈即自（存在）〉にかかわらせ「付け足し」にしておかねば、〈意識〉としていう〈対自と即自との関係〉を問えないのであって、〈即自〉は〈対自〉とまったく関係することがなくなり、〈即自〉なる〈観念〉さえ不必要になろう。つまり〈わたし〉を〈即自〉に「付け足すことではじめて、〈対自（意識）と即自（にかかわる〈わたし〉）との関係〉が、要は〈この対自（意識）〉に〈この世界（わたし）〉を含めさせていう〈統合〉が成り立つといえるからして、そのためにも〈わたし〉が欠けてはならないのだ。

にもかかわらず、この〈わたし〉やあの外的〈世界〉について言及せずにおれないのは、〈わたし〉や外的〈世界〉がそれぞれ〈意識（対自）〉に「付け足しにされた」ことを優先させて捉えられるよりも、繰返すが、〈わたし〉は〈意識（即自）〉に、外的〈世界〉は〈わたし〉に各「付け足しにされた」とみなすことにある。なかでも筆者が今質さんとする外的〈世界〉は、上記のごとくしかなかつたことを、要は外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされた」ことを、次に掲げる既出引用文および語句によって証明させることが可能になる。それらは〈おのおの人間存在は、…即自存在の全体としての世界を自らのものにする企てである〉、〈ひとつの個別的な存在〉や〈わたしはわたしの存在の根拠ではない〉である。最初の文章中の〈人間存在〉は〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉にあつたし、〈即自存在の全体（totalité d'être-en-soi）〉と記された〈全体〉は〈全体〉だからして、〈意識〉なる〈即自存在〉と、この〈即自（存在）〉に「付け足しにされた」ように「かかわる」〈わたし〉と、サルトルいわく〈即自存在〉なる外的〈世界〉をさすほかに、〈自らのものにする

(こと) (appropriation) は〈自分というもの (自我) (personne)〉すなわち〈わたし (のものにする)〉として受け止めることにする。だから外的〈世界〉はかかる〈全体〉の一となる。次の語句〈ひとつの個別的な存在〉は筆者には何よりも、〈人間存在〉に語られるのと同様たる〈この対自 (意識) とこの世界 (わたし)〉との〈統合〉により成るとみえたが、この語句にもまた例の〈ひとつの〉との表現が窺われるため、彼はそこに外的〈世界〉を取り入れた、「もう」〈ひとつの個別的な存在〉を用意させていたと読み取らねばならなくなる。〈ひとつの〉に「もう」〈ひとつの〉を重ねる〈個別的な存在〉を〈統合〉として理解せんとするとき、外的〈世界〉はそれ自身〈人間存在〉に直接組みしなはいとはいえ、それでも〈対自は無であ〉ったがゆえに、その〈対自 (意識)〉に帰属していわれよう〈個別的な存在〉になるのではない。外的〈世界〉はだから、〈わたし〉に従うところでの〈個別的な存在〉でしかなくなるわけだ。しかもこのことによって、筆者は外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされ」て「かかわる」ことを明かし得る。最後の文章において、〈わたしの存在の根拠〉は彼が〈わたしが存在することは完全に偶然的なのである〉と強調するにあっては、どこにも見当たらなくなるのか。〈人間存在〉の〈統合〉からして、こうした〈根拠〉は〈意識 (対自や即自)〉に見出せるといえそうである。なぜなら〈わたし〉が〈意識 (対自)〉に「付け足しにされた」ごとくに「かかわ」ればこそ、〈わたし〉は〈意識 (対自)〉と無関係にみられはしなかったからである。だが筆者は〈わたし〉を〈意識 (対自)〉にこのように「かかわ」らせることにおいては、〈わたし〉は〈意識 (対自や即自)〉それ自身ではないといえたがゆえに、そこに〈わたしの存在の根拠〉を見届けることができなくなるは当然である。しからば〈わたし〉が〈意識 (即自)〉に「付け足しにされた」といわせたことではどうか。もしこの見方を否定してしまうならば、〈わたしの存在の根拠〉だけか、〈わたし〉に「付け足しにされ」て在る外的〈世界〉のこの〈根拠〉すら完全に見失われるし、〈わたし〉はそれこそ〈人間存在〉の〈統合〉の一をのみか、そこに外的〈世界〉も加えられて成る〈個別的な存在〉の〈統合〉の一を担うことさえ不可能になるにちがいない。否。なれば〈意識 (即自)〉〈わたし〉や外的〈世界〉 (外的〈世界〉は〈意識 (対自)〉には〈わたし〉と相

違して「かかわる」ことはない)も〈存在する〉ことを話題にしていた彼にとって、〈偶然的〉かによるかは措くとして、〈わたしの存在の根拠〉は〈ない〉のではなく、〈意識(即自)〉に「かかわる」ところにみられるのであり、さらに〈わたし〉にたえず付きまとう外的〈世界〉に求められることにあるといわせずにはおれなくなろう。

さすれば以上の〈わたし〉と外的〈世界〉を関係させるにあって、サルトルはどのように語ったかを聞かなくてはならぬであろう。これについて、まず筆者は何にしても、彼の哲学のなかで、〈わたし〉が〈意識(対自)〉に劣りはせぬ役割を受け持たされると思えるのに、たとえば筆者に〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」にしかみえないのが真であるならば、その〈わたし〉は外的〈世界〉と同様に、筆者の思いと隔てられて、それほど位置も占められずにとどまる以外になかったといわざるを得なくなろう。それはともかく、〈わたし〉の役割はすでに一見した通り、〈投企〉〈参加〉や〈行動〉(あるいは〈選択〉)にあった。〈わたし〉が〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」とは推察するに、〈わたし〉は〈意識〉が現に働(動)いている〈即自(存在)〉に「かかわる」ことをさすほかになかろうが、それでも〈意識〉が「〈即自(存在)〉のままでは〈対自(存在)〉になれな」かった。そこで〈意識〉を〈対自(存在)〉に向かわせるべく、彼は〈投企〉などを提唱することになったとみる。だがこの〈投企〉などは当初、〈意識(即自(存在))〉に生じる〈観念〉にほかならないし、当然〈投企〉などを試みようとするからには、そのための、その何らかの目標を同時に設定する〈意識(即自(存在))〉の「働き(動き)」なしに、〈投企〉などは実現されない。だからこれを現実に可能にさせるうえで、要は〈意識〉が〈対自(存在)〉に成ろうとするうえで、〈意識〉とは別の「働き(動き)」が必要となる。その「働き(動き)」を実行させるのが〈わたし〉であり、〈わたし〉による「働き(動き)」自体が〈投企〉などと名付けられた行動(運動)である。こうした〈投企〉などは〈わたし〉が〈意識〉の〈即自(存在)〉に「付け足しにされた」ように〈存在する〉〈わたしの存在の根拠〉に、少なくとも〈わたし〉が彼の哲学として登場する〈根拠〉になる。なぜならこれも疾うに触れたように、実際の〈投企〉などは〈意識(即自(存在))〉内での〈投企〉

などの〈観念〉をもたらす「働き（動き）」によっては可能にならないほどに異なる「行動（運動）」にならざるを得ないからである。たとえば現実の〈投企〉などは身体を動かす「行動（運動）」も欠かせなくなる。これを実現せしめるのが〈わたし〉であるのだ。〈わたし〉が実際に〈投企〉などをするのであり、〈意識〉が試みることではもはやない。

そのとき、つまり〈わたし〉が〈意識（即自（存在））〉で得た目標をもって〈投企〉などを実際に課するとき、その目標が〈事物〉や〈他者〉をめざすにあるかにかかわらず、〈わたし〉が〈投企〉などに走るは同時に、この〈事物〉や〈他者〉なる外的〈世界〉に接していることを〈わたし〉に含意させずにおれなくなると読むことができる。筆者は彼にいう〈わたし〉が何らかの〈投企〉などを選択する場合、その結果は知らされねど（彼は結果は〈偶然（性）〉だというに決まっている）、〈わたし〉の「選択」も〈偶然（性）〉だけに終始するとはいえない気がするが、それでも確かなことと思えるは、〈わたし〉が〈投企〉などによって、〈わたしの世界-内-存在全体（mon être-dans-monde en totalité）〉に関係することにおいて、かつその〈投企〉などによって、〈意識〉の〈対自〉や〈即自〉という〈存在全体〉の、なかでも〈即自〉に「かかわる」〈わたし〉に「たえず付きまとう」外的〈世界〉が〈意識（対自や即自）〉そのものではなく、〈わたし〉に現出しては、〈わたし〉に「付け足しにされた」ことにおいて、〈人間存在（個別的な存在）〉の一なる〈統合〉が日の目をみると指摘できる（他の一は次回に語る〈無〉に関する）ことにある。このように、〈意識〉の〈即自〉に「付け足しにされた」ごとくにしか〈存在〉していない〈わたし〉はその〈存在〉に〈投企〉などをもたらしながら、同時に、外的〈世界〉と接触させられるだけでなく、〈意識〉をば〈対自（存在）〉にさせ得る役割をも担わされてくる。〈わたし〉の役割は以上から、次の通りに、すなわち一に、〈わたし〉が〈投企〉〈参加〉〈行動〉と〈選択〉の、いわば主体（主役）になり得た、一に、〈わたし〉は〈意識〉の〈即自〉に「付け足しにされた」、一に、〈意識〉ではなく、〈わたし〉こそが外的〈世界〉に接し得た、一に、〈わたし〉は〈わたし〉の〈投企〉などをして〈意識〉を〈対自（存在）〉たらしめる手助けになり得たとしてまとめられる。たとえば上記中の一である、「〈意識〉ではなく、

〈わたし〉こそが外的〈世界〉と接し得た」と筆者に記させ得たのは、サルトルが〈人間と世界は相対的な存在であり、… こうして世界がわたしに指し示す、この第一義の（相対的な）関係はわたしの存在であり、かかる関係によって、わたしのために、世界があらわれるようになる〉と語っていたことによるからである。

しかし〈人間と世界 (l'homme et le monde)〉について言及される、前記既出引用文にあって、〈世界〉は筆者にいう外的〈世界〉であるとみなされるにせよ、ここでの〈人間〉は〈人間存在〉とは書かれぬからして、〈意識〉をではなく、続く文章中に記される通り、〈わたし〉をさすほかなくなる。しかるにこの〈わたし〉がサルトル哲学のなかで、その分析に豊む〈意識（対自や即自）〉に比して、どれだけ明晰に語られているかは、筆者が彼に、たんに〈わたし〉は〈意識（対自や即自）〉に「付け足しにされた」という表現を見出し得ただけで明らかにできたといいい得ないほどに等しいと、換言すると筆者の浅い読みすぎぬかもしれないが、前記既出引用文の〈わたし〉をはじめとして、彼はしばしば〈わたし〉を登場させ語れども、かつここに〈人間存在〉と明記させずとも、〈人間〉をば〈意識〉と〈わたし〉なる二様に見立てていたりする（〈意識〉は〈わたし〉ではない）ことでは、少なからず〈わたし〉をあやふやにとどまらせているように感じられるということである。例の〈この対自とこの世界〉たる表記でもって、彼は〈この対自〉を〈意識〉に、〈この世界〉を〈わたし（と外的〈世界〉）〉にあらわさずして置いた。それに肝心なことは、〈わたし〉でなければ、いったい何が〈投企〉などを、〈対自（存在）〉に向かわせる〈意識〉を、外的〈世界〉への接触を現実にするかである。これらのことは〈意識〉自体では可能にならないのだから、〈わたし〉の役割となるしかなく、この〈わたし〉によって強調されねばならぬのに、それすら今一明確にされはしないのだ。それでもこれらのことが〈意識〉で実現されるといわせるにあっては、繰返しになれど、〈わたし〉はばかりか、〈投企〉などは、〈意識〉との接点としていえる「付け足しにされた」は、あわせて外的〈世界〉のことはそれぞれ何のために用いられたのか定かでない。また今質す外的〈世界〉も前記既出引用文で語られたことと相違して〈わたし〉と無関係になってしまうはその一例でしかなくな

る。

むろんサルトルが〈自己自身を規定する〉と記す以上、〈自己自身〉すなわち〈わたし〉にかかわるからして、上記したようなことはないにちがいない。とはいえ筆者のみるところ、〈わたし〉と外的〈世界〉の関係は、外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされた」関係にあったと指摘したがゆえに、わけても〈意識〉の〈即自〉に「付け足しにされた」〈わたし〉のこととともに、彼にいう哲学にとって、それほど重視されてはいなかった。その証拠は、彼が〈人間(存在)〉を〈意識(存在)〉と〈わたし(の存在)〉とで成り立たせたうえで、〈わたし〉を〈他者〉と、これと同時に、外的〈世界〉をも〈他者〉と述べていたことにある。そこで筆者は〈他者〉といえたために、〈わたし〉も外的〈世界〉も(〈わたし〉は〈即自〉に、外的〈世界〉は〈わたし〉に各「付け足しにされた」ので)〈意識(対自や即自)〉そのものにみられないだけか、だから〈即自存在〉と判断させてならぬと付加し得たわけである。外的〈世界〉はもとより、〈事物〉や〈他人〉という諸対象としての〈他者〉であり、これ以上でも以下でもない。外的〈世界〉も〈わたし〉に「付け足しにされた」にすぎぬからして、彼がこれを〈他者〉と呼ぶのか分からねど、諸対象が〈わたしではない〉ために〈他者〉でしかなくなるのだ。

筆者にとって問われるは、サルトルが〈わたし〉を〈他者〉と断じたことである。上記したように、彼は〈人間〉を〈意識〉と〈わたし〉で〈構成される〉とみていたし、筆者も〈わたし〉が〈意識(対自)〉に、さらに〈意識(即自)〉に各「付け足しにされた」と捉えおいたが、ここでその〈わたし〉が〈他者〉であることを踏まえると、なぜか彼にあって、〈人間〉に対する二様の見方をして、すなわち〈人間〉の〈統合〉に向け〈意識〉に「付け足しにされた」〈わたし〉でなければならぬ見方をして一つにさせる以外になくなり、その結果をして〈意識〉を優位に立たしめる思想(哲学)が生み出されていたというほかない。要は彼は〈わたし〉を〈他者〉として〈意識〉に入り込ませるよう意図したのだ。以上を筆者なりに説明せんとすれば、次の通りになろうか。〈他者とは、事実、他人である、すなわちわたしではないわたしである〉ことであつた。ならば一に、〈他者とは、... わたしである〉は筆者に、〈わたし〉が〈他者〉で

あることを指し示すかぎり、〈わたし〉は〈他者〉となって、いわば〈対自〉や〈即自〉とされる〈意識〉のなかに住みつく〈わたし〉になるのであり、こうした〈他者〉にみられるがゆえに、〈わたしはわたしの存在の根拠〉にもならないと読ませ得る。したがって一に〈他者とは、…わたしではないわたしである〉といわせるなかの〈わたしではない〉は〈わたしではない〉からして、〈意識〉をささざるを得なくなるし、かかる〈わたしである〉は〈意識〉の〈他者〉にしかなり得ないというわけである。このようにみては、〈わたし〉が〈他者〉としても〈意識〉に「付け足しにされた」と、これにより〈意識〉との〈統合〉に近づくことができたといえるであろう。

〈わたし〉が〈他者〉であるは、外的〈世界〉の諸対象としての〈他者〉と違い、〈わたし〉が〈意識〉をいわば主体とみなすなかの〈他者〉であるとされるところからは〈他者〉の意味する中身が同じでなくとも、〈他者〉として〈わたし〉が〈意識〉に、外的〈世界〉が〈わたし〉に各「付け足しにされた」ことにおいて、それぞれは共通する役割を担うといっておかまわないであろう。だが共通するといえども、〈わたし〉や外的〈世界〉は〈他者〉以外になり得ぬことでは、サルトル哲学の中枢を占めることがない、つまりそこにあって前面に打ち出されることがなかったのである。それでも筆者には、彼が〈意識〉のなかに〈わたし〉すなわち〈他者〉を配置させたは何かしら、〈わたし〉の不明確さを明確にさせてみよう、彼の意図の証しになるのではないかと受け止められるのだ。繰り返すが、彼はこの意図をして、ある意味〈意識〉中心の哲学を成立せしめ得たのである。しかしながら彼に〈フッサールはカントと同様、独我論を免れることができないであろう<sup>(2)</sup>〉といわせても、彼の哲学は〈わたし〉が主に述べ語られる論ではないのだから、サルトルはこの〈独我論を免れる〉といわねばならない。筆者が〈独我論を免れる〉と断じたのは、〈自我〉について言及もする彼が、〈自我〉を〈わたし〉とみるにしても、〈自我(わたし)〉は〈意識〉に「付け足しにされた」わけだから、当然「付け足しにされた」にすぎない役割しか持ち得ず、〈自我(わたし)〉がないといわれるのと同じになるからである。しかし〈自我〉が〈意識〉と捉えられるならば、〈自我(意識)〉があることになるためか、彼もまたフッサールやカントと同様に、〈独我論を免れる

ことができない)にちがいない。ただ〈自我〉すなわち〈意識〉の見立ては可能かということになろう。それこそ彼自身が〈わたし〉が〈他者〉なる〈自我〉として〈意識〉に「付け足しにされた」ことを認めてしまうほかないことを示唆させるのである。

それに〈わたし〉が〈意識〉のなかに〈他者〉として取り込まれたとみなす際、〈わたし(他者)〉が前記していた通り、サルトルにいう〈意識〉にか、〈意識〉と同じにみる、〈精神〉にか、はたまた〈魂〉にか、〈他者〉は〈わたし〉かは別にしても、〈他者〉という思想は彼以後にも受け継がれていたと指摘し得る<sup>(3)</sup>。とまれ彼は〈わたし〉を中心とした哲学を構想せぬがために、〈独我論を免れる〉し、ある既出引用文では〈わたしは、…投企である〉と語り、筆者においては〈他者〉としての〈わたし〉がゆえに〈意識〉に「付け足しにされた」とみえたのだから、筆者は彼には『存在と無』にしばしば取り上げられた《コギト》を語る資格が果たしてあったのかといわねばならなくなる。〈わたしは思惟する〉《コギト》は彼にあって、〈わたし〉ではなく、〈意識〉になるとみななければならぬからである。〈意識〉に「付け足しにされた」〈わたし〉には〈思惟する〉「働き」がない。それゆえ《スム》なる〈わたしは存在する〉のではなく、〈意識〉こそ〈対自〉や〈即自〉としてのみ〈存在する〉ことになるといえるからである。

〔続〕

#### 註

- (1) Jean-Paul SARTRE 《L'être et le néant》(Gallimard) P.275 〈Autrui, en effet, c'est l'autre, c'est-à-dire le moi qui n'est pas moi.〉
- (2) Ibid., P.280 〈Il (Husserl) ne saurait donc, pas plus que kant, échapper au solipsisme.〉
- (3) 筆者は既紀要で、サルトルが自らの実存主義と相違した思想を構造主義と命名したと記しおいたが、さらにここでの〈他者〉思想が現代のフェミニスト、エレヌ・シクシー(Hélène Cixous(1937年-))などにより展開されているともみることができるからして、いかなる展開かはともかくも、サルトルは〈他者〉思想への先鞭をつけた人でさえあろうといい得る。